中四国学生剣道連盟
四十年誌

四十年誌

中四国学生剣道連盟

中四国学生剣道連盟四十年誌

「剣気」とは、剣により気を知り、気で鍛えることであって、人間は宇宙大自然によって生かされ、また生きてきている。
その天理遵法の真理に従って肉体、精神を鍛えると最高の力が発揮できるものである。

〈植田　一 先生揮毫〉

第9回中四国学生剣道新人戦
第2回中四国学生剣道新人戦
第32回中四国学生剣道
第12回中四国女子学生剣
第39回 中四国学生
第19回中四国女子学生剣道選手権大会
第八回中四国学生剣道選手権大会
全日本女子連盟
毎日新聞社
第九回中四国学生剣道選手権大会
全日本女子連盟
毎日新聞社

歴代大会パンフレット

新人戦

●1994年12月4日
●岡山理科大学加計記念体育館

優勝大会

●1994年8月21日
●広島市マツダスポーツセンター体育館

選手権

●1994年5月15日
●松山市総合コミュニティーセンター体育館

第14回中四国学生剣道新人戦

第41回中四国学生剣道優勝大会
第21回中四国女子学生剣道優勝大会

第41回中四国学生剣道選手権大会
第26回中四国女子学生剣道選手権大会

選手権大会開会式入場

新人戦

男子優勝杯

女子個人優勝杯

男子最優秀選手杯・メダル

男女優勝レプリカ

入賞メダル

入賞トロフィー

優勝大会

男子優勝旗

女子優勝杯

男女最優秀選手杯・メダル

男女大森杯

レプリカ（最優秀選手賞・大森杯・優勝）

選手権

男子選手権盾

女子選手権杯

入賞トロフィー

歴　代　会　長

三代会長 石田成夫

（昭和44年～48年）

二代会長 中塚正行

（昭和41年～43年）

初代会長 津田誠次

（昭和37年～40年）

六代会長 腰山静雄

（平成4年～現在）

五代会長 大森玄伯

（昭和61年～平成3年）

四代会長 隅田哲司

（昭和49年～60年）

未来への確かな歩みを

中四国学生剣道連盟会長
腰山静雄

平成七年、本連盟は創設四〇周年を迎えることになりました。これを機に四〇年の歴史を振り返り、その足跡を記録に止め、往時を想い、今後の連盟発展に資するための記念誌を発刊できることになりましたことを、皆様と共に喜びたいと存じます。そしてこれが、五〇周年に向かっての一つの道標となることを期待いたしております。

四〇周年記念誌の発刊に当たっては、中四国学生剣道連盟を支え、発展にご尽力賜りました先輩並びに各方面の方々に執筆協力をいただき、また、編集委員の皆様には多忙の中、献身的にこの事業に携わり、立派にその責を果たしていただいたことに対し深甚の謝意を表します。

記録によれば本連盟は、昭和三〇年にわずか数大学により発足したということであり、爾来、歴代会長をはじめ学生役員、先輩役員等の並々ならぬご尽力により年々隆盛に向かい、今日では加盟四三大学をもって構成される連盟にまで発展してまいりました。私は六代目の会長としてその職を穢しておりますが、創設以来、連盟発展に貢献されて来られた先輩役員、就中、連盟の歴史と共に歩んでこられた大森玄伯・植田一両先生のご存在は誠に偉大なるものであり、両先生なくして中四国学生剣道連盟の歴史は語れません。大森先生（前会長）は平成四年惜しくも逝去されましたが、植田先生は現在も常任顧問として、かくしゃくとして当連盟のためご教示いただいていることはこの上ない幸せであり、心より感謝申し上げる次第であります。

剣道の本質は、全日本剣道連盟により示されている「剣道の理念」そのものであり、学生剣道もこれを外れては考えられないと思います。剣道はこれを行ずることにより自己形成及び社会形成の確立を目ざすものであります。大森前会長が常に言われていた言葉、「王者の剣」に凝縮されていると思います。私たちは後世に「正しい剣道」を如何に伝えていくか、に大きな責務を負わされていることに思いを致し、剣道の更なる発展に最善の努力をしなければと痛感するものであります。植田先生（剣道範士九段）揮毫にかかる『剣気』の連盟旗（平成五年作製）のもと、次の五〇周年に向かっての確かな歩みのための方略を求めていかなければならないと存じます。

また、連盟発展の歴史の節目としての四〇周年に第五一回国民体育大会（広島）剣道競技のリハーサル大会として、中四国学生剣道優勝大会が八月に開催されることになっております。四〇周年の記念大会に相応しい意義あるものになることは望外の喜びであります。

終わりに、本記念誌の発刊に協力いただきました関係各位に、また、編集、発刊までご苦労をおかけした編集委員に対し重ねて感謝の意を表し、発刊のご挨拶といたします。

目次

発刊のことば　未来への確かな歩みを……3
祝辞　歴史・文化・国際的な視野をもって／次代の先駆として／日本文化として／宇宙規模の発想を……8

第一章　四〇周年によせて――13
知・徳・体のバランス／連盟旗「剣気」のもとに／大学剣道の使命／㈱大森先生と私／民族の美意識／日本剣道形の重要性／学生剣道の役割／めざそう生涯剣道／不惑になった中四国剣道連盟／四〇年前の大会から／新しい目標に向かって／稽古の指針……14

第二章　中四国学生剣道連盟四〇年のあゆみ――27

歴代会長を回顧する・戦後剣道の復活に貢献／剣道に憧れた明治の男／一一年の長きにわたって／最後の稽古まで……28
中四国学生剣道連盟四〇年の歩み……32
資料・大会記録／歴代役員……57

第三章　栄光とそれを支えた人々——115

栄光をみつめて・幸運だった全日本出場／思い出の一本／二つの課題と取り組んだ学生時代／大学時代に得たもの／最高の思い出／無欲の勝利／剣道に感謝／剣道に賭けた青春／勝利の三点セット／告白／連続優勝に輝いて／剣道師範の思い出／連覇に向けて／六連覇ならず／五連覇の思い出／栄光への道のり／トップレベルを目指して／無意識の勝利／五二年の異変から／自信を勝利の道へ／きらめきを放つ時代だった……116
いろいろありました・回顧／思い出のアルバム／第一、二回大会の頃／三三年前の中四大会／ひとつの試み／女子大会を開く／楽しかったあの時／めぐりあわせ……132
われ剣道を愛す・無限の可能性／友との出合い／真仁剣の会／学生期の剣道／地方色を大切に／『道』の指導／悔いのない人生／初心者に学ぶ／剣道との二〇年／剣の道は人の道……138

第四章　連盟とわが剣道部……147

幹事長として／座談会「学生役員、中四学連を語る」／リーダーズセミナー報告・講演・全員で合宿と練習を考え、やったあの頃／何のために剣道をやっているのか／剣道の思想とロマンチシズム／国際交流への取り組み・岡山大学剣道部の国際交流／等身大の国際交流／私たちは日本で何を探し求めたのか？……148

我が剣道部をＰＲする！・四〇大学が我が部を公開……170

監督として連盟と学生諸君へ・思い出のままに／交剣と貢献／真摯敢闘を!!／自分自身を鍛える／監督の役割／学生諸君に期待すること／学剣士に問う／剣道から何を学びますか／熱き心を持て／期待するもの／これからの中四国連盟と剣道部／居合のすすめ／いつまでも若々しく／自主性・創造性・目的志向性／「打ち込んだ」といえるものを／日本人と剣道／学徒学者の剣／飛躍するための〝何か〟／学生にとっての剣道／人によって伝えるもの／監督雑感／生涯剣道を／気品ある剣道を／剣道観の形成と実践を／大森先生の教えを求めて／正しい道を／学生諸君に／監督の役割六つのこと……250

第五章　明日に向かって……269

連盟への期待・剣道の日常化／礼の精神／大学と高校の連携を密に／大学と地域の盛

んな交流を／剣道指導者の育成／地元大学の情報を／一歩のゆとり／学生剣道に期待する／感動できる大会に……270
連盟への思い・剣道普及にむけて／それが私たちの求める剣道だろうか／世界でも剣道を／中四国から全国へ／より一層の発展のために／楽しい剣道の追究／王者の剣道を／大学間の交流を進めよう／スパイラルな関わりを／地方都市でも大会を／メディカル・スタッフの育成を／情熱をもって当たれ……276

第六章　資料集

285
加盟大学・組織機構図……286
研究資料・場外の研修会／竹刀と場外に関する調査／剣道障害調査……288
連盟規約の変遷・昭和二九年／昭和四一年／昭和四九年／昭和六一年／平成五年……302
あとがき……311

表紙題字　会長・腰山静雄
水墨画　村嶋恒徳

歴史・文化・国際的な視野をもって

全日本学生剣道連盟会長　松本良諄

この度、中四国学生剣道連盟が、四〇周年記念誌を発刊されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

中四国学生剣道連盟が結成四〇周年を迎えられたことは、まことに慶ばしい限りで、衷心よりお祝い申し上げます。

これもひとえに、困難な状況の中で、連盟結成に尽力された先輩、並びに多年にわたり運営に当たられた役員諸氏のご努力の賜物と、深く敬意を表する次第であります。

また、平素より全日本学生剣道連盟（学連）に賜っているご協力に対して、心から深く感謝するものであります。特に、貴連盟では、故大森玄伯先生、植田一先生が当初から指導に当たっておられ、学連の役員も勤めていただいたので、随時、有益なご指導を賜る機会を得て、まことに有難く存じました。

申すまでもなく、剣道は単なるスポーツではなく、無論、勝負事ではありません。剣道はその修錬を通じて人間形成をめざす「道」であります。剣道を修錬している学生は卒業後の針路は違っていても、剣道を正しく学ぶことにより、諸々の徳性を身につけ、豊かな人間性を培うことができ、そこで生涯得難い友を得ることもできます。

さて、剣道界の当面する最大の問題は、青少年剣道人口の減少傾向であります。その原因は幼少年人口の減少をはじめ、複雑多岐を極め、その対応は頗る困難でありますが、剣道が戦後辿った道及び現状を直視して、新たな発展のための方策を練り、できることから実行することが大切であります。剣道は日本の勝れた伝統文化であるから、これを世界に通じる文化として二一世紀に発展させることが剣道人の使命であり、青少年剣士にそのような夢や希望をもたせることが、これからの振興策の主眼であると考えます。

このような観点から、学連は全剣連に対して、かねてより色々と要望してきましたが、そのうち、全日本剣道選手権大会の出場資格が変わり、段位制限が無くなって、成人の男子は誰でも参加できることになりました。次は、昇段審査の修業年限を短縮して、在学中の三段あるいは四段の昇段者をふやしたいと要望しています。

学連はまた、数年前に廃止した地域対抗試合に代わる公式試合など、有意義な行事、二一世紀につながる剣道の将来構想等を、専門委員会等で検討しています。

中四国学生剣道連盟におかれては、四〇周年を機に、初心に還って加盟校の期待に添うよう努められるとともに、今後は特に歴史的、文化的、且つ国際的な視野をもって、剣道の普及発展と人材の育成のために尽力されることを期待いたします。学連も相携えて、できるだけの支援をしたいと存じます。

終わりに、中四国学生剣道連盟の一層のご発展をお祈りして、祝辞といたします。

次代の先駆として

毎日新聞大阪本社事業本部長　鳥居宏司

中四国学生剣道連盟四〇周年を心からお祝いします。その間、連盟の創設、維持、発展に寄与された人々のご尽力、ご苦労に敬意を表します。とりわけ戦後、剣道の「追放」という苦難を乗り越え連盟を創設された方々の情熱と献身に、思いを深くする次第です。

戦後、スポーツを先導し、発展の中核を果たしたのが大学であり、剣道もその例外ではありません。しかし、昨今、スポーツに対する志向の多様化、あるいは少子化に伴い、スポーツの在り方が転換期を迎えています。しかし他方、日本の伝統的な精神文化に根ざす自己錬磨の道、剣道に国際的な関心が高まっています。学生、生徒、社会人が共に目指す技の精髄を一にする剣道は、次の時代にも強固な耐性と発展への弾性を持っていると思います。

学生剣道発展に微力ながら支援してきた毎日新聞社は、今後も皆様と相携え前進する所存です。貴連盟の一層の隆盛をお祈りし、次代の先駆となられるよう祈念いたします。

日本文化として

岡山県学生剣道連盟ＯＢ連合会会長　産賀（うぶか）敏彦

中四国学生剣道連盟四〇周年を心から御祝い申し上げます。

この四〇年間を振り返ってみますと、戦後の武道禁止時代後の草創期を経て現在に至るまで、中四国学生剣道連盟は着実に発展してこられました。この間にあって同剣道連盟は中四国地方における学生剣道の発展に大いに貢献され、剣道を通じて育成した無数の有為な人材を社会に送りだしてこられました。これはひとえに同剣道連盟関係者の献身的な御尽力の賜であると深く敬服し、心から感謝申し上げる次第であります。

我が国は戦後の廃墟から驚異的な復興を遂げ、現在経済・技術大国として世界の注目を集めるに至っております。私はこの素晴らしい復興と発展は、名誉を重んずる武士道の精神と無関係ではないと思います。新渡部稲造博士は著書「武士道」の中で、明治維新後の日本の急速な進歩は自己発生的なものであって外国の単なる模倣ではなかったと述べておられますが、これは戦後の日本の発展にも通ずるものと思われます。

しかし、現在我が国は進歩の過程における新しい段階にあると思われます。すなわち文化の外形的側面である経済力や技術力を支える創造的な科学研究の推進、知識に偏らない人間的な教育の重視、基本的人権の尊重や真の国際交流の必要性等が新たに認識されるに至っております。

献身的に剣道の御指導に当たっておられる諸先生方の御姿を拝見するとき、懸命に剣道の修業に励む学生諸君を目にするとき、また剣道を通じて人生の規範を学び剣道を心の支えとして社会の様々な分野で活躍しておられる卒業生の姿を思い浮かべるとき、剣道修業に内在する向上心の素晴らしさに心を打たれます。この向上心がこれまでの社会の発展の推進力となってきたものであり、更に今後の進歩にも大きな力になるものと思います。

新渡部博士は武士道の究極の理想は平和であり、倫理の掟としての武士道は消えるかもしれないが、その香気は人生を豊富にし、人類を祝福するであろうと述べておられます。諸外国を見渡しますと、欧米諸国における合理的精神に基づく自然科学の発展、インドにおける数字の発明、ギリシャにおけるアルファベットの発明、中国における漢字の発明等人類社会の進歩発展に対する大きな貢献は枚挙にいとまがありません。このような各国各民族の文化と歴史を理解し尊重することが真の国際交流の為に必要であると思います。そして我々は我が国固有の伝統文化である剣道を通じて日本文化を再認識し、これを真の国際親善に役立てたいものであります。

中四国学生剣道連盟の益々の御発展を御祈りするとともに、今後とも人類の進歩発展に貢献する有為な人材を御指導御育成賜わらんことを心から御願いする次第であります。

宇宙規模の発想を

広島県学生剣道連盟ＯＢ連合会会長　吉田正麾

この度、中四国学生剣道連盟四〇周年記念誌を発刊されることに対し心からお喜びと敬意とを表します。中四国学生剣道連盟の来し方、往茫四〇年を顧みる時、そこにはドラマのような激動の日々に耐えて来た歴史の重みがあります。

私の属する広島県学生剣道連盟ＯＢ連合会が呱呱の声を挙げたのは、それ迄の学生剣道ＯＢの会が連合体化を図り、紆余曲折のあと昭和五四年三月四日、学生剣道連盟ＯＢ連合会拡大準備委員会として広島大学学生会館二階の一室で発足した時でありました。

ここに至るには大森玄伯先生の並々ならぬ御熱意と御協力があったからでありまして、その目的とされる所はＯＢとして学生剣道への側面的な応援が出来ないものかという一点であり、更に踏み込んでＯＢと学生の親睦融和を計りたいとのお考えからでありました。

学生剣道連盟ＯＢ連合会が発足して間もなく御多忙の大森先生に代わり、昭和五四年、大友瑞立先生が非常な御熱意を以て会長職を御継承になりましたが、五年目の志半ばの状態の中で急逝され、次いで昭和五九年、竹原省吾先生が御就任になり、逐次体勢を整えつつある時御他界され、そのあとを享けて昭和六二年一〇月より私がその職を受け継がさせてもらっています。しかし、この道程も中四国学生剣道連盟のその四〇年に旦る歴史に比べると漸く半ばにも達しません。この広島県学生剣道連盟ＯＢ連合会は故大森玄伯先生の御遺徳を永く御敬慕申し上げる意味で昭和六三年秋より大森杯争奪全国学剣ＯＢ広島大会を開催し、年々内容の充実と組織の拡大とに意を用い、着々その実績をあげて来ております。中四国学生剣道連盟の激動の四〇年を振り返って見ますと、昭和二八年、日本剣道連盟が新しい日本の剣道として発足した翌々年の昭和三〇年に創設されております。

戦後の日本が古い体質の眠りから覚めてまるで一八〇度の変換を強いられ、昭和二〇年八月一五日ポツダム宣言を受諾し、連合国に降伏するや大変革がもたらされ、連合国が日本を占領、その司令官としてマッカーサーが着任、同時に日本の民主化政策が一挙に行なわれる事になりました。すなわち治安維持法の廃止、農業政策の改革など絶対的な権力を駆使しての日本改造となりました。更にマッカーサーは日本に対して男女の同権、労働者の団結権、教育の自由化、統制の廃止、経済の民主化の五大改革を指令して憲法改正迄も強制してきたのです。教育面では修身、日本史、日本地理、武道の授業の即刻停止が決定され、社会一般でも剣道柔道弓道は廃止の浮き目を見、剣道具銃剣道具は焼却処分される所まで追い込まれ、剣道にとっては苦難の時代を迎える事になりました。

これ迄の統制体系から急激な大変革の中に解き放たれ自由主義体制の中へ突入した日本、この大変革の中で国民は混迷の中の生活を余儀無くされ、途方に暮れた大多数の日本人の中に剣道一筋に打ち込んで来た人々の集団があった事を忘れてはなりません。それから数年経ち、志ある人々の手によってフェンシングに近い剣道、即ち撓競技なるものが考案され、連合軍の法の網の目をかいくぐって剣道としての余命を繋ぎ止めるための一方策として始められた事は特筆すべき事柄であります。

古来の剣道が再び陽の目を見たのは吉田首相が米国と講和条約を締結した後の事であり、前述の昭和二八年に日本剣道連盟が誕生し、剣道復活が成し遂げられた時からであり、爾来四〇年の来し方を振り返り先輩方の御苦労が偲ばれます。中四国学生剣道連盟にたずさわって来られた代々の諸先生、諸学生諸賢の御苦労に対して深甚の感謝を捧げ衷心よりお礼を申し上げます。

昨年一〇月、広島県で地方都市として初めてアジア圏四二か国の選手七、三〇〇名が大集合して三三七種目にわたる大熱戦を展開した第一二回アジア大会が様々な記録、友情、思い出を残して閉幕しました。せめてアトラクションとしてでもよい、学生剣道の試合を と思ったのは私一人では無かったのではないかと思います。

このアジア人のアジア大会が色んな意味で頭の毛、眼の色の黒い国の者同士の連帯感が、オリンピック大会とは異なった意味での融和の大会であった事を考えると、日本個有の武術の剣道を皆さんに見てもらいたかったと思った次第です。この融和の輪を大切にするためにも、吾々地球人は宇宙規模で環境を考える時に来ています。剣道人としても剣道修練の心構えの中に『国家社会を愛し広く人類の平和と繁栄に寄与する』よう言っており、率先して宇宙規模での環境を考える姿勢は堅持すべきと思います。

御祝いを申し上げるべきが多少脱線の気味がありました事をお詫び申し上げ、これに携って来られた諸先生学生諸兄の御健勝と中四国学生剣道連盟の益々の御発展を希ってお祝いの言葉とします。